6年生の男の子が学校でお漏らし！新卒の女性教師におちんちん拭き拭きされ、射精までさせてもらった話

新学期が始まってまだ2週間しか経っていない、とある小学校の6年2組。

担任は今年新卒で赴任したばかりの、22歳の女性教師・白石優花先生だった。

優花先生は黒髪のセミロングに、優しそうな大きな目と柔らかい笑顔が印象的な、細身でスタイルの良い女性だ。

生徒たちからは「ゆうか先生」と親しみを込めて呼ばれ、男子生徒たちにも特に人気だった。

この時の授業は社会科。

優花先生が黒板にいろいろ書きながら説明していると、後ろの席に座る男の子・佐藤悠真が、そわそわと体を動かし始めた。

悠真はクラスで一番背が低く、童顔で可愛らしい顔立ちの男の子。

朝から少しお腹の調子が悪かったが、授業中にトイレに行くのが恥ずかしくて我慢していた。

「え一縄文時代は10000年続いたんですね、これは縄文天皇が10000歳まで生きたわけではないですよ……」

優花先生の声が続く中、悠真の額に汗が浮かぶ。

下腹部に強い尿意が襲ってくる。

「ううっ……もう限界かも……」

しかし、授業の真っ最中。

周りのクラスメイトは真剣にノートを取っている。

悠真は必死に足を組み替え、両手で股間を押さえながら耐えていた。

すると突然、悠真の体がびくっと震えた。

我慢の限界を超え、温かい液体がパンツの中にじわじわと広がっていく。

「やばい……出ちゃう……」

ぴゅっ、ぴゅっ……と音を立てて、おしっこが止まらなくなった。

灰色の短パンと白い下着がみるみるうちに濡れていく。

椅子に座ったままの状態で、お漏らしが始まってしまった。

悠真の顔が一瞬で真っ青になる。

周囲に気づかれないよう必死に体を縮こまらせたが、床にまでぽたぽたと滴が落ちる音が小さく響いた。

クラスメイトの何人かが「なんか匂う……？」と鼻をひくつかせる。

優花先生も異変に気づいた。

「佐藤くん？ どうしたの？ 顔色が悪いよ……」

悠真は声を震わせながら立ち上がろうとしたが、足がガクガクして動けない。

短パンの股間部分が大きく暗い染みになり、太ももまで濡れているのがはっきり分かった。

「先生……僕、お漏らし……しちゃった……」

教室が一瞬、静まり返った。

女子の何人かが「えー！？」と小さな悲鳴を上げ、男子たちはクスクス笑い始める。

優花先生は慌てて教卓から出て、悠真のそばに駆け寄った。

「大丈夫、大丈夫だよ。先生が助けるから。みんな、ちょっと静かにしててね」

優花先生は悠真の肩を抱き、教室から連れ出す。

悠真は歩くたびに濡れた短パンが股間に張り付き、冷たい感触が気持ち悪い。

顔を真っ赤にしてうつむき、涙目になっている。

「ごめんなさい……先生……恥ずかしい……」

「謝らなくていいよ。とりあえず保健室行こう。」

2人は空いている保健室に入った。

優花先生はドアを閉め、鍵をかける。

「悠真くん、座ってて」

保健室のベッドに悠真を座らせ、優花先生はロッカーを開けてタオルとウェットティッシュ、着替え用の学校指定のジャージを取り出した。

「まずは濡れた服を脱がなきゃね。先生が手伝うよ」

悠真は恥ずかしさのあまり体を固くする。

「先生……自分でやる……」

「ダメだよ。大丈夫、先生がちゃんとしてあげるから」

優花先生は優しい声で言いながら、悠真の短パンのベルトに手をかけた。

ゆっくりとファスナーを下ろし、濡れた短パンを膝まで引き下ろす。

白い下着はびしょびしょに濡れて、透けてしまっていた。

悠真のおちんちんが、下着の布地に張り付くように浮かび上がっている。

「うわ……結構たくさん出ちゃったね……」

優花先生が少し驚いた顔で呟く。

悠真は両手で顔を覆い、「見ないで……」と小さく泣きそうな声を出した。

優花先生は悠真の下着もゆっくりと下ろした。

濡れたおちんちんが、ぴょこんと外気に触れて露わになる。